

巻頭言

平成16年度は、滋賀医科大学創立30周年と看護学科開設10周年のアニバーサリーヤーでした。この節目の年に、滋賀医科大学看護学ジャーナル第3巻を10周年記念特別号として発刊できましたことは、ひとえに看護学科全スタッフのご協力のお陰と感謝します。顧みますと、学科全員が等しい貢献度で成し得た数少ない仕事のうちの大きな業績であると確信します。

学科の開設当初は、四年制大学における看護教育の早発校として、理想の姿を手探りしながら誰もが全力投球で教育に取り組んでいた時期でありました。看護に対する社会的ニーズの高まりを実感し、有能な看護医療職を大学教育で育てることへの責任を感じながら、滋賀医大に在籍された多くの先達と議論を繰り返し、学科の今日を築いてきました。

一昨年、幸いにもカリキュラムが改訂され、新カリキュラムのもとで看護教育の基盤は整ってまいりました。これからは、教育と研究の両輪を軌道に乗せて、滋賀医大看護学科が研究面でも大きく羽ばたき前進する第二期を迎えることとなります。

この記念特別号の趣旨は、看護学科に籍を置く現スタッフの研究を紙面で発表し、10周年を迎えた学科の存在を内外にアピールすることにあります。そのために、総勢28名の教員が単独または共同で取り組む研究を紹介し、それらの原稿の査読にも関わる全員参加型の紀要作りを編集の基本方針とした次第です。

その方針を貫くことにより、研究を介して学科内の相互理解がなされ、共同研究が更に発展する可能性が生じると思われます。また、若いスタッフが査読に関わることで、論文をクリティークする目も養われて、学科全体の研究レベルアップに繋がることも期待されました。

とは言え、正直なところ、総説、原著、研究報告など合わせて18題もの論文を投稿していただけたことは予想外の喜びで、記念特別号は100ページを超える立派な冊子となりました。学科内で取り組まれていた多彩な研究の殆どを知らないままであったと改めて気づかされました。そうした研究のいくつかは、この機会に恵まれなければ、当分は陽の当たらないまま埋もれる運命をたどったかもしれません。少なくとも全スタッフの日頃の努力を等しく公表できる機会を提供できたことを有意義であったと信じています。

その分野の専門家の目で批判すれば、18題の論文の完成度にはかなり幅広い開きがあることを指摘されるかもしれません。それらを含めて、滋賀医大の看護研究の現状として公表できたことを私はむしろ誇りにさえ思います。学科の全スタッフにはこれを機に研鑽を積み上げて、学内外で新たな研究の発展を図って欲しいと祈念いたします。

滋賀医科大学 看護学ジャーナル
特別号 編集委員長 今本喜久子